

文化芸術交流

言葉や文化の違いを超えた感動は、日本への興味と共感を生み、日本文化の深い理解へとつながる源泉となります。ジャパンファウンデーションでは、そのような源泉を生み出す場の提供を目指し、市民青少年を含む多様な文化の担い手と連携しつつ、伝統から現代までさまざまな日本文化の魅力を海外に向けて発信し、また、人的交流の推進を行っています。



KITA(私たち)の共通の未来のために——日本インドネシア国交樹立50周年事業

KITA!!プロジェクトでは、現地での美術状況調査(2007年3月)、作家自身による事前調査(2007年7月)を経て、2008年4月から5月にかけての1カ月間、インドネシアの地方都市であるバンドゥンとジョグジャカルタにおいて、レジデンスとワークショップを通じて作品を制作し展覧会として結実させる一方、ジャカルタでは二つの公演を実施し、日本とインドネシアのマンガ家の作品を掲載するマンガ本も制作するなど、現代美術だけではなく音楽、ファッション、食、ダンス・パフォーマンス、そしてマンガまでの幅広い分野を網羅した野心的で欲張りなプロジェクトでした。本プロジェクトはキュレーターである豊嶋秀樹氏と高橋瑞木氏の企画趣旨から始まりました。

本事業のタイトルである「KITA」はインドネシア語の「私たち」という意味である。しかし日本人には「KITA」は「来た」でしかない。テーマを「モノから人へ」、「アートを介した国際交流のオルタナティブな仕組み作り」とした本企画にとって、お互いがそれぞれの国の言葉でしか「KITA!!」を理解しないのは、本末転倒だ。だから、キュレーターにとっての目標のひとつは、KITA(私たち)とKITA(来た)の間を埋めること。作家が日本からインドネシアに「来た」結果、表現やものづくりの楽しさを地域の人々と共有し、最終的にはインドネシアも日本もなく、「私たち(KITA)」となることだった。(「KITA!!」展記録集[p.157]より)

2008年は日本インドネシア国交樹立50周年であり、日本とインドネシアのこれまでの美術交流の歴史を踏まえつつ、未来に向けての50年を志向することが求められていました。そのためには祝祭的な一過性のイベントとして終わるのではない“何か”が求められていました。言い換えれば、新たな関係性をつくるのが課題なのでした。そこでジャパンファウンデーションとキュレーターは、現在の等身大の日本の若者文化をプログラムに反映するため、普段着の若い日本人作家と、親しみやすい音楽、ファッション、マンガなど複合的な要素をインドネシアの日常に送り込んだのです。結果として総勢約60名がインドネシアの地を踏みました。全事業の最終的な入場者数は約10,000人。入場者数でいえばもっと多くを見込める首都ジャカルタではなく、地方都市のバンドゥンとジョグジャカルタでの同時開催を選んだのは、両都市のオルタナティブ・スパー

スや美術館関係者の意欲的な活動を通じて、美術コミュニティが一般庶民の生活の中に溶け込んでいるからでした。

さて、日本のキュレーターの企画が野心的であればあるほど、これを美術に対する考え方も制度も異なるインドネシアというアウェイの地で実現させるのは、日本人参加者にとってはチャレンジングな経験であったのは事実です。インドネシアは初めてだという作家たちがほとんどでしたが、これがどうでしょう、心配をよそに驚くべき適応力を見せたのです。川べりのコミュニティの人たちと一緒にゴミ製大魚(アロワナ)を作り上げた淀川テクニックの感動的な展覧会オープニングのシーンをはじめ、異なる環境のもとで格闘した作家たちの姿は現地の人々に温かく迎えられたのでした。反対に、このプロセスを通じて、日本の作家たちがインドネシアの人々や社会から無形の大きな収穫を得たのも確かです。

また、珍しいキノコ舞踊団のダンスやチャンチキトルネエドなどの演奏はダイレクトにインドネシアの人々の心を掴んだようです。パフォーマンスアーツの力は大きく、フェスティバルとしての祝祭性は展覧会だけでは実現できない盛り上がり魅力とを、このプロジェクトに添えていたのです。

本事業の全記録は、映像記録と冊子によって記録集としてまとめられています。

- キュレーター：豊嶋秀樹(グラフィメディア・ジーエム代表)、高橋瑞木(水戸芸術館現代美術センター キュレーター)
- 出品作家：大石暁規、小鷹拓郎、トーチカ、近藤聡乃、しりあがり寿、八谷和彦、高木正勝、西島大介、南風食堂、シアタープロダクツ、チャンチキトルネエド、SONTON、生意気、浅井裕介、淀川テクニック、西尾康之、Chim ↑ Pom、珍しいキノコ舞踊団、YNG(奈良美智+graf)、都築響一、志賀理江子、松本力、バラモデル、宇治野宗輝



上：生意気(Kinky Muff Land III - edible urban party jungle studio (free food forest foundation)), 2008
下：淀川テクニック(Yogyakarta's Arowana) (2008)の制作風景
Courtesy of YUKARI ART CONTEMPORARY

舞台芸術交流・海外公演：中国、韓国

音楽を通じた韓国・中国との交流

韓国および中国で、若手ミュージシャンによる公演を通じ若い世代の交流を深めました。

Les Frères(レ・フレール)韓国公演

2008年10月、兄弟ピアノ・デュオLes Frèresによる韓国3都市(ソウル、釜山、済州)公演を開催しました。現地の人気音楽番組に出演して息の合った演奏を披露するなどの広報努力が功を奏し、公演日には大勢の若者が当日券を求めて列をつくり、追加席を出すほどの盛況となりました。

1台のピアノを2人で自由自在に操りながら繰り広げられるライブは、巨大スクリーンで演奏の様子を映し出し、観客との一体感を作り出す演出も相まって大きな反響を呼び、日本の音楽の新たな魅力を伝える機会となりました。Les Frèresは今回の初めての韓国公演をきっかけに、近隣諸国での活動を展開しようとしています。



Les Frèresのソウル公演 ©Yuu Kamimaki

Soothe(スーズ)中国公演

Sootheは、邦楽器の津軽三味線・和太鼓、洋楽器のギター・ベース・ドラムの、五つの楽器それぞれの音を等しく活かした音楽づくりに取り組むグループです。初めての海外公演となった中国で7都市(北京、ハルビン、南京、上海、マカオ、香港、珠海)を巡回、劇場、大学、ライブハウスなどで公演し、若年層を中心に計14,000人の観客を集めました。Sootheの音楽はもちろん、三味線や和太鼓による独奏もまた、新鮮な響きとして多くの中国の若者に受け入れられました。北京では、ビデオジョッキーのDaDaKingZ(ダダキングス)が参加、1日限りの音楽と映像を作り出しました。上海では、中国琵琶などを用いた同地のバンド「冷酷仙境(Cold Fairyland)」(名前は村上春樹の作品に由来)と共演するなど、同世代の演奏家とも交流を深めました。

造形美術交流・海外展：ブラジル

異種混合の展示空間

—ブラジル・日本のアート作品展

「ライフがフォームになるとき——未来への対話」は、日本ブラジル交流年(日伯交流年)のメイン事業のひとつとして、サンパウロ近代美術館を会場に2008年4月から6月まで行われました。

長谷川祐子氏をキュレーターに迎え、建築、ファッション、デザイン、映像、音楽を含む幅広い創造活動を対象に、1950～60年代そして1990年代以降のブラジル・日本両国のアーティストの作品を展示しました。

長谷川氏によると、ブラジルと日本に共通するのは、「近代化の過程で、辺境の場所にあり、風土や歴史に根ざした独自の文化を形成したこと」と、「それぞれの持つ異種混交(ハイブリディズム)と異文化受容能力の高さ」とのこと。

そうした文化状況を背景に本展は、日本から18作家、ブラジルから20作家を選び、「パブリックへの共生の提案」「新しい秩序としての幾何学」「大衆文化とアート」「ポエティックなマイクロポリティクス」といったいくつかのセクションを提示することで、立体的にこの二つの文化を検証できるようにしました。

会期中は多くの入場者で賑わい、また日本人作家によるワークショップなども活発に行われました。副題に掲げられたように、日本、ブラジルの文化が混合することで、現代から未来に向けてのひとつの対話が生まれたに違いありません。

○キュレーター：長谷川祐子(東京都現代美術館 事業企画課長)

○出品作家：

【日本人作家】青木陵子、赤瀬川原平、足立喜一郎、ISSEY MIYAKE、伊藤存、小谷元彦、荒神明香、小金沢健人、SANAA、高木正勝、タカノ綾、田中敦子、Chim↑Pom、照屋勇賢、坂茂、森万里子、山口勝弘、吉岡徳仁

【ブラジル人作家】Assume Astro Vivid Focus, Isabela Capeto, Rogerio Degaki, Lina Bo Bardi, Lygia Clark, Lucia Koch, André Komatsu, Leonilson, Marepe, Ruy Ohtake, Tomie Ohtakeほか



サンパウロ近代美術館での展示風景
Museu de Arte Moderna de Sao Paulo
©Luigi Stavale, 2006

文化としての日本料理を紹介

日本料理と日本の食文化の新たな魅力を紹介することを目的にレクチャー・デモンストレーションを行いました。各地で「春の懐石料理」をテーマに講演を行い、調理の実演をしました。

専門家の優れたパフォーマンスにより、正しい知識に基づく掘り下げた内容による、「文化としての」日本料理の理解と普及に大きく資する結果となりました。

レクチャーの内容

- ①気候風土(四季と季節感、日本の国土の特徴などについて)
- ②日本料理の歴史(稲作、製塩法から発酵食品の発達、本膳料理の確立や諸外国からの影響などについて)
- ③器(陶器・磁器・漆器・木器・金属器・ガラス器と季節感について)
- ④道具(包丁の種類について)
- ⑤日本料理の特徴(季節としきたり、栄養面、盛り付け、だしについて)



料理学校におけるデモンストレーション(スペイン・サラマンカ)

アニメをきっかけに日本文化に触れる



ストックホルム(スウェーデン)における講演

アニメ『千年女優』『東京ゴッドファーザーズ』などの監督・今敏氏をスウェーデン、ノルウェー、フィンランドに派遣しアニメに関する講演会を行いました。各地の講演会では、今氏の作品を上映するとともに、ご自身の作品や制作過程についてお話いただき、参加者より「独特の世界観を持つ今監督の考え方を聞くことができ、興味深かった」「日本のアニメの多様な面を見ることができた」などの反響を得ました。また、アニメーションをきっかけに、日本語の学習を始めた若者も多く、質疑応答の際には日本語で質問をする参加者も見られました。とくに、スウェーデンでは大学で映像について学んでいる学生を対象に、作品の制作プロセスに関するレクチャーのほか、日本文化に興味を持つ学生との懇談も行いました。

「日本・ドナウ交流年」オープニング事業 — 欧州2カ国で能楽公演を実施



能「葵上-梓之出」
(ウィーン公演)
シテ 武田志房
© 社団法人能楽協会

日本とドナウ川流域の国々との友好を図る「日ドナウ交流年2009」。開幕記念事業のひとつとして、2009年2月、ルーマニアとオーストリアの2カ国で能楽公演を実施しました。

公演では、社団法人能楽協会会員の能楽師20名が狂言『伯母ヶ酒』、能『葵上-梓之出』を上演しました。ルーマニアは今回が初の能楽公演ということもあり、1,000席を超えるブカレスト国立劇場大ホールが2日連続で満席となるなど、大きな反響がありました。また、能楽師によるマスタークラス(全4回)では、現地の俳優やダンサーが、能・狂言の基本所作を習得しようと熱心に取り組む姿が見られました。

UNIT ASIA ジャズコンサート 東南アジアツアー

日本をはじめアジア各地で活躍する個性豊かな5人のミュージシャンによるジャズグループUNIT ASIAを特別編成し、2008年10月中旬から約1か月間、東南アジア5カ国で巡回公演を開催しました。メンバーは、三好功郎(ギター)、則竹裕之(ドラム)、一本茂樹(ベース)、コー・Mr.サクスマン(サクソ/タイ)、そしてテイ・チャー・シアン(ピアノ/マレーシア)。マレーシアでのリハーサルを経て船出したUNIT ASIAは公演を重ねるごとに進化を遂げ、この出会いに対する出演者自身の喜びが音楽にエネルギーをもたらして、各国の観客を魅了しました。2009年2月の日本(東京・京都・名古屋)でのライブも好評を博したUNIT ASIAのさらなる展開が期待されます。



UNIT ASIAの
マニラ公演

文化協力：アフガニスタン

内戦からの伝統文化復興に
日本の陶芸専門家が協力

ジャパンファウンデーションは、伝統的陶芸イスタリフ焼の復興と地域活性化を目指し、2002年夏よりアフガニスタン・イスタリフ村との交流を続けています。将来のイスタリフ焼を背負って立つ若手人材を招へいし、「一国の伝統と誇りの復活に貢献する」事業として高く評価されています。

2008年度は、次世代への技術指導、関係者間のネットワーク構築、陶芸文化への理解促進をおもな目的とし、2005年に同事業の一環として日本を訪れた陶工のうち、もっとも若い2名をイスタリフ村から再び招へいしました。

今回の指導にあたった砥部焼八端窯伝統工芸師の白濁八洲彦氏と李朝陶芸家の永岡泰則氏は、それぞれ同事業の一環で、イスタリフ村にて現地調査およびワークショップと(2003年度、白濁氏)、イスタリフ焼きの土および釉薬成分に関する日本国内での調査を経験しました(2006年度、永岡氏)。そうした経緯もあり、今回は、白濁氏と永岡氏のご支援を受け、ガス窯製作、石膏型を使用した成型、大型陶器作成といった、より専門的な研修が実現しました。

また、国内外の機関のご協力により★1、効果的・効率的な事業実施ができました。とりわけ滋賀県立陶芸の森は、2008年度東アジアクリエイター招へいプログラムのアーティスト・イン・レジデンス実施団体としての連携をきっかけに関係を深めてきた組織で、本事業は、他団体との継続的な連携が成果を挙げた好例となりました。

★1——社団法人日本ユネスコ協会連盟、滋賀県立陶芸の森、愛知県立窯業高等技術専門学校、瑞浪市窯業技術研究所、恵那市立串原中学校、信楽陶器工業組合ほか。



愛知県立窯業高等技術専門学校にて釉薬の説明を受ける



イスタリフ焼(2007年)
撮影：(株)包

造形美術交流・国際展

横浜トリエンナーレ、
30万人を超える来場者

ペドロ・レイエス《ベイベー・マルクス》、2008、撮影：上野則宏
Courtesy of the Artist and Yvon Lambert Gallery

今回で3回目を迎えた現代アートの国際展「横浜トリエンナーレ2008」が、2008年9月13日から11月30日までの79日間にわたり開催されました。

会場は新港ふ頭エリアにある三つのメイン会場を中心に、多様な表情を見せる横浜市内7カ所が舞台となり、会期を通じた来場者数は30万人を超えました。

「情報過多な日常の時間に流されることなく、時間の淵にたたずみ、その裂け目(クレヴァス)を覗き込むスリリングな体験の場を提示したい」という水沢勉・総合ディレクターの構想による「Time Crevasse(タイム・クレヴァス)」という全体テーマの下で、パフォーマンス的要素を重視した作家が多く選ばれました。

会期中は参加作家出身国の在京大使館や文化交流機関と共同で実施した「ナショナルデー」、出展作品のひとつであるリングドームを舞台に、日本の若手アーティストによる音楽、ダンス、トークといったイベントを実施した「リングドーム・イベント」など、週末を中心に多様な関連プログラムが実施されました。観客のなかには、横浜に来なければ見ることができない作品／パフォーマンスが多かった点に横浜トリエンナーレの独自性を感じたという声も多かったようです。

また今回は、初の外国人キュレーターの起用や同時期に開催されたアジアの国際展(上海、光州、シンガポール、シドニーの各ビエンナーレ)と広報面での連携を図り、さらに海外メディア記者の横浜トリエンナーレへの招へいを行うことで、海外への発信力強化に力を入れました。その結果の現れとしては、前回展に比べ海外のメディアで取り上げられた記事件数も4倍増となり、国際色豊かなイベントとなりました。

○総合ディレクター：水沢 勉

○キュレーター：ダニエル・バーンバウム、フー・ファン、三宅暁子、ハンス・ウルリッヒ・オプリスト、ベアトリクス・ルフ

○出品作家：オノ・ヨーコ、中谷芙二子、ヘルマン・ニツチュ、勅使川原三郎、ダグラス・ゴードン、マシュー・バーニー、ポール・チャン、ツアオ・フェイほか

持続可能な社会を目指すNGO交流

持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development : ESD)の経験や知識の共有と関係者間のネットワーク形成を目的として、ブラジル、メキシコ、エクアドル、インドネシア、ラオス、ケニア、南アフリカの7カ国からNGO団体の若手職員15名を12日間招へいしました。一行は東京と沖縄の環境教育の取組みを視察したほか、「ESD国際フォーラム2008」(主催:ユネスコほか)にも参加。日本の持続可能な社会づくりの取組みやESDに関する国際的な動向についての理解を深める一方、会議やワークショップを通じた他国の関係者との交流は、参加者にとって、今後の活動へ向けたなよりの原動力となりました。



ゴミの埋立跡地を森に変える「海の森」事業を視察

アジア映画ベストセレクション

2009年3月、赤坂・OAGホール(東京都)で「国際交流基金アジア映画ベストセレクション——いま、見逃せないアジアの映画たち」を開催しました。ジャパンファウンデーションは、1982年の「南アジアの名作を求めて」を皮切りに、アジア映画を新鮮な切り口で紹介し続けてきました。今回は、アジアの「いま」をうつし出す映画に注目し、インドネシア、マレーシア、インド、フィリピン、タイより、『虹の兵士たち』(本邦初公開)を含む6作品を上映し、2日間で1,300名を超える

観客を集め、満員札止め回も出るほどの盛況ぶりでした。現代のアジアに生きる人々の生活や社会を丹念に見つめた作品から、その多様性が織りなす文化的な深さと、新しい映画の息吹を感じることができました。



第18回開高健記念アジア作家講演会

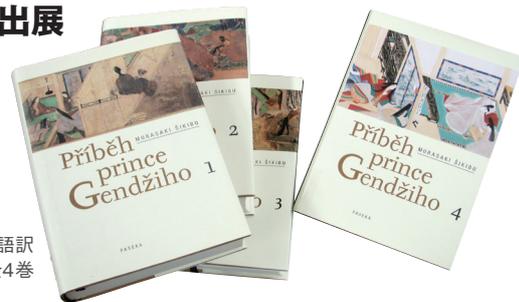


ドー・ホアン・ジュウ氏

この事業は、故・開高健氏のご遺族からの寄付金をもとに、90年より「開高健記念アジア作家講演会シリーズ」として開始されたもので、毎年アジアより作家や文学関係者などを日本に招へいし、各地で講演会や意見交換を行うなど、日本で紹介される機会の少ないアジア文学を多くの人々に紹介しています。第18回となる2008年度は、ベトナムの新進女流作家、ドー・ホアン・ジュウ氏を招へいし、「ベトナム戦争とドイモイの狭間」を主題に、国内4都市(函館、仙台、東京、大阪)で講演会を行いました。この機会に、2005年にベトナムで出版され、注目を集めた同氏の代表作『金縛り』が加藤栄・大東文化大学准教授によって本邦で初めて翻訳され、アジア作家と交流の深い作家・高樹のぶ子氏との対談も行われました。

第14回ブックワールド・プラハへ日本ブース出展

チェコ語訳
「源氏物語」全4巻



2008年4月、アール・ヌーヴォー様式が美しいチェコ・プラハの工業宮殿で第14回ブックワールド・プラハが開催されました。ジャパンファウンデーションは、日本の出版文化の紹介のため(社)出版文化国際交流会、在チェコ日本大使館と共同で日本ブースを出展しました。折しも、源氏物語千年紀にあたる2008年2月に、ジャパンファウンデーションが出版助成を行ったチェコ語全訳『源氏物語』(カレル・フィアラ訳、パセカ出版社)の最終巻が出版され話題を呼んでいましたが、翻訳者であるフィアラ氏の講演会が日本ブース横の会場で実施され、『源氏物語』の魅力について語られると、図書館を訪れた聴衆は熱心に耳を傾けました。

文化芸術交流事業概観

1—日本文化紹介派遣

トピックで取り上げた今敏氏(p.9)のほか、横田正夫氏(日本アニメーション学会会長)、伊藤比呂美氏(詩人)、田辺小竹氏(竹工芸師)など、アニメ、文学、建築、工芸、食文化(p.9)、武道など日本の文化15分野の専門家を世界各地に派遣し、講演、デモンストレーション、ワークショップなどを実施しました(45カ国69都市、24件)。また、52件の助成を行いました。

2—文化人招へい

グミラル・ルスリワ・ソマントリ氏(インドネシア大学学長/インドネシア)、スチュアート・ダイベック氏(作家/米国)、キリル・セレブレニコフ氏(演出家・映画監督/ロシア)など、文化の諸分野において大きな影響力を持つ各国の文化人を日本に招へいし、日本の実情視察、関係専門家などとの意見交換を行いました(25カ国、27名)。

3—文化協力

アフガニスタンの陶芸制作における人材育成(p.10)、ブータン、ロシアの文化財・歴史記録制作、ベトナムの遺跡保存・修復などに協力するため、専門家派遣・招へいの事業を実施しました(4カ国4都市、4件)。また、10件の助成を行いました。

4—市民青少年交流

環境教育および持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development: ESD)の分野で実績のある海外NGO団体の若手職員をブラジル、インドネシアなど7カ国から15名招へいし(p.11)、また、日本に関するドキュメンタリー作品の制作のため、アフガニスタンなど中東3カ国から映像専攻の学生6名を招へいしました。また、79件の助成を行いました。

さらに、21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)プログラムの一環として、「環境—自然との共生と持続可能な循環社会」をテーマに、身近な環境問題・環境教育に取り組んでいるNGO/NPO関係者および初等・中等教育の教育関係者を日本に招へいし、環境分野に関わる日本の取り組みを紹介し、シンポジウムを開催しました(15カ国、48名)。

5—中学高校教員交流

海外の青少年の日本理解および国内の異文化理解の促進を目的に、世界各国の中学・高校の教員を日本に招へいし、岩手県立盛岡高等養護学校、さいたま市立大宮八幡中学校、京都市立新町小学校など、日本各地で学校訪問、文化施設などの視察や交流を行いました(55カ国、201名)。

6—開高健記念アジア作家講演会シリーズ

故開高健氏の遺族からの寄付金をもとに、1990年度から実施しているアジア作家の講演会シリーズ。第18回目にあたる2008年度は、ベトナムの作家、ドー・ホアン・ジュウ氏を日本に招へいし、国内4カ所(函館、

仙台、大阪、東京)で講演会を行いました(p.11)。

7—国際展

第11回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展(コミッショナー：五十嵐太郎、出品作家：石上純也、大場秀章)、第13回バングラデシュ・ビエンナーレ(コミッショナー：植松由佳、出品作家：米田知子、須田悦弘)に日本代表として参加するとともに、第3回横浜トリエンナーレ(総合ディレクター：水沢勉/ p.10)を横浜市、NHK、朝日新聞社との共催により実施しました。



ヴェネチア・ビエンナーレ建築展、展示風景
©The Japan Foundation

8—海外展

海外および日本国内の美術館などとの共催で、トピックで取り上げた「KITA!!」展、「ライブがフォームになるとき」展(p.7.8)のほか、「WA—現代日本のデザインと調和の精神」展(フランス)、「エモーショナル・ドローイング」展(韓国)、「場が物語るもの」展(タイ)、「現代広告写真」展(ロシア、シンガポール)などの企画展を実施しました(7カ国9都市、8件)。また、45件の助成を行いました。

さらに、「90年代の日本の絵画」「現代日本デザイン100選」「日本人形」「現代日本の陶磁器」「武道の精神」(武道の歴史と現在を紹介する展覧会)など、伝統から現代まで幅広い分野を扱う展示セット(計17セット)を世界各国に巡回する展覧会を、在外公館、海外の美術館などと共催で実施しました(53カ国94都市、94件)。

9—国内展

これまで十分には日本で紹介されてこなかった海外の優れた美術を紹介する目的で、「エモーショナル・ドローイング」展(東京国立近代美術館、京都国立近代美術館)、「アヴァンギャルド・チャイナ」展(国立新美術館、国立国際美術館、愛知県美術館)を会場となった美術館との共催で実施しました。また、9件の助成を行いました。

10—造形美術情報交流

美術関係者の交流を促進する目的で、アジアの美術館のネットワーク構築を目指した「第4回アジア次世代美術館キュレーター会議」(日本)、日豪美術フォーラムへの専門家派遣などの事業を行いました(16カ国、4件)。

また、21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)プログラムの一環として、アーティスト、デザイナーなどクリエイティブな分野/産業に従事する若手クリエーターを日本に招へいし、作品制作やネットワーク構築のための機会を提供しました(13カ国、22名)。

11—海外公演

トピックで取り上げたLes Frères, Soothe(p.8)、

能楽、UNIT ASIA(p.9)の各公演事業のほか、ジャズ(今田勝カルテット/フランス、ウズベキスタン)、邦楽器と洋楽器の組み合わせによる現代音楽(Group BAKK Japan/ロシア、ウクライナ、リトアニア)、津軽三味線(吉田兄弟/ニュージーランド、フィジー)、コンテンポラリーダンス(白井剛/ルクセンブルグ)、歌舞伎舞踊と錦絵(坂東鼓登治ほか/インドネシア、タイ)などの公演事業を実施しました(48カ国84都市、25件)。また、105件の助成を行いました。

さらに、「パフォーミングアーツ・ジャパン(PAJ)」事業(日本の優れた舞台芸術作品を紹介しようとする米国の非営利団体、欧州の文化芸術関連団体に対する助成)を通じ、28件の助成を行いました。

12—国内公演

日本国内においてあまり知られていない国・地域の舞台芸術・芸能を日本に紹介する目的で、ドウドウ・ニジャエ・ローズ(セネガル)によるパーカッション・オーケストラ・コンサートを実施しました。また、10件の助成を行いました。

13—国際舞台芸術共同制作

日本、フィリピン、韓国の3カ国の劇団がフランスのヴィクトリアン・サルドウの戯曲『ラ・トスカ』をベースに共同制作を行うプロジェクト「トスカ・プロジェクト2008」を実施し、完成作品を韓国、フィリピンで上演したほか、井手茂太氏(イデビアン・クルー主宰)振付のもと、日本とタイのダンサーによるコンテンポラリーダンス作品「コウカシタ」を共同制作し、第1回「フェスティバル/トーキョー」で上演しました。

14—舞台芸術情報交流

国内外の舞台芸術団体、プレゼンター、フェスティバル実施団体、劇場、地方公共団体間の情報交流促進を図るため、東京芸術見本市2009、日本の舞台芸術情報を日本語・英語のバイリンガルで発信するウェブサイト「Performing Arts Network Japan」(<http://www.performingarts.jp/>)などの事業を実施しました(11件)。

15—日本理解促進出版・翻訳

日本語で書かれた優れた図書(人文/社会科学/芸術分野)の外国語への翻訳および外国語で書かれた日本文化紹介図書の出版を支援する公募プログラムにより、65件の助成を行いました。また2008年度は、2007年度から進めていたアラビア語への翻訳・出版が完成した、NHK「明治」プロジェクト編著『明治』、および大野健一著『途上国ニッポンの歩み』をアラビア語圏各国の教育機関などへ寄贈するとともに、著者をエジプト(カイロ)に派遣し、講演会を実施しました。

16—国際図書展

日本の出版文化の紹介と対日理解促進のため、第53回ベオグラード国際図書展(日本がテーマ国)や第14回

ブックワールド・ブラハ(p.11)など、海外で開催される国際図書展に参加しました(12カ国12都市、12件)。

17—テレビ番組交流促進

日本のテレビ番組の海外放映を促進するため、ザンビア国営放送への『プロジェクトX～挑戦者たち～』の番組提供など、海外の放送局に対する支援を行いました(20カ国、22件)。

18—映画・テレビ番組制作

海外における日本理解を促進するため、日本のロボットに関するドキュメンタリー『ASTROBOY IN ROBOLAND』(フランス)など、日本に関する映画とテレビ番組への制作費助成を行いました(4カ国、7件)。

19—海外日本映画祭

ニューヨークでの「仲代達矢特集」映画祭、東欧巡回映画祭など、在外公館・海外文化機関などとの共催で、日本映画祭・上映会を実施しました(45カ国51件)。また、海外の国際映画祭などが主催する日本映画上映に対し助成を行いました(22カ国、49件)。

20—国内映画祭

日本で紹介される機会の少ない諸外国の映画を紹介する目的で、「国際交流基金アジア映画ベストセレクション」を実施しました(p.11)。また、11件の助成を行いました。

21—映像・出版情報交流

海外の出版社・翻訳者向けに季刊誌『Japanese Book News』を刊行するとともに、日本映画の基本情報を海外に提供する目的で『New Cinema from Japan』をユニジャパンと共同で発行しました。また、第34回「日本賞」教育番組コンクール(主催：NHK)において、国家・民族間における相互理解と文化の交流に貢献する優れた番組に対し「特別賞・国際交流基金理事長賞」を授与するとともに、韓国で日本に関する著述活動または日本書籍の翻訳活動を行っている若手・中堅の優れた著述家・翻訳家に対し、「国際交流基金ポラナビ著作/翻訳賞」を授与しました。



左：『Japanese Book News』Winter 2008
右：『New Cinema from Japan』Autumn 2008

22—国際漫画賞・アニメ文化大使事業への協力

海外でマンガの普及啓蒙活動に貢献する新進のマンガ作家を顕彰する「第2回国際漫画賞」(主催：国際漫画賞実行委員会)の最優秀賞受賞者・劉雲傑氏ほか3名の受賞者を日本に招へいするとともに、海外におけるアニメ文化大使(ドラえもん)の外国語字幕付DVDの上映会に協力しました(61カ所84回)。